

小学校5・6年生 学習資料

小学校5・6年生
学習資料

別府学
郷土を学ぶ



別府学 郷土を学ぶ



別府市教育委員会

別府市教育委員会

	小学校
5年	組
6年	組
氏名	

小学校5・6年生のみなさんへ

わたしたちが住んでいる別府市は、日本一の温泉のほかに、豊かな自然や長い歴史や文化があります。また、別府市の発展に努力した人たちも多くなります。

このことを、よく学んで、もっと別府のことを知ってもらうために、みなさんが勉強する社会科や理科の内容にあわせた「別府学」

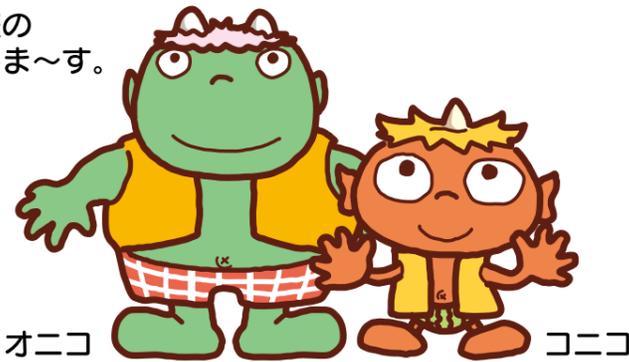
という本をつくりました。

この「別府学」の本では、写真や絵をたくさん使い、みなさんが興味を持って学習できるように工夫しました。

この本で、よく学んで、ふるさと別府を思う心を持って、みなさん一人ひとりがすばらしいまちをつくってほしいと願っています。

別府市教育委員会

別府じごく小学校のオニっ子が案内しま〜す。



オニコ コニコ

目次	自然	人々の暮らしと里山の自然…………… 2
		1 自然のすがたを残した鎮守の森
		2 湿地や棚田
		3 ススキ草原で生きのびた草花
	4 里山の動物	
歴史	別府のはじまり…………… 8	
	旧石器～縄文時代～弥生時代	
	鬼ノ岩屋古墳群と実相寺古墳群	
観光	観光の歴史……………10	
	地獄のうつりかわり	
	地獄めぐりのはじまり	
	地獄めぐりバスの運行	
温泉	別府八湯の歴史……………14	
	別府温泉	
	浜脇温泉・観海寺温泉	
	堀田温泉・明礬温泉	
	鉄輪温泉	
	柴石温泉・亀川温泉	
	今も残る温泉建物……………24	
	駅前高等温泉・竹瓦温泉	
	温泉の利用……………26	
	温泉を利用した観光施設	
	医療や健康	
	農林水産業での利用	
	エネルギーとしての利用	

別府の暮らし	別府を発展させた交通……………28
	路面電車・鉄道
	港と船舶の歴史……………30
	別府築港から国際観光港
伝統文化	伝統産業……………32
	湯の花、七島蘭、竹細工
	別府の民謡……………34
	別府の祭り……………36
文化	別府を描く……………38
	パンフレットになった別府
	切手になった別府
	絵になった別府
	文学碑……………42
地図……………44	
先人の功績	
	スポーツ選手……………46
市長のメッセージ……………48	

さあ学ぼう 別府



市民憲章

1. 美しい町をつくりましょう
2. 温泉を大切にしましょう
3. お客さまをあたたかく迎えましょう

昭和43年1月制定

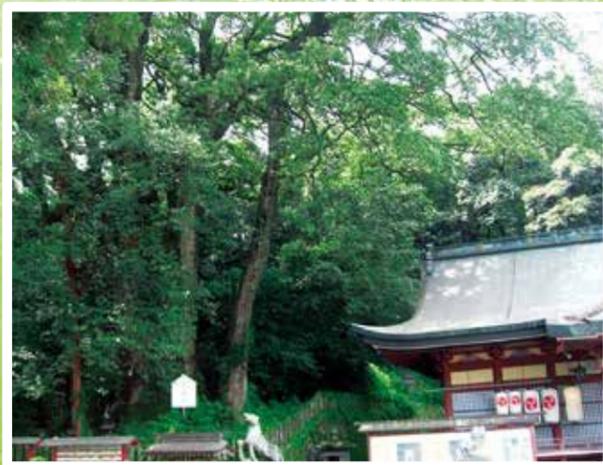
くら 人々の暮らしと里山の自然

1 自然のすがたを残した鎮守の森

文化財保護法では古くからその地に在って、その地の自然の姿を現した原生林や神社の森(社叢)などを天然記念物として保護しています。

【1】朝見神社のクスノキとアラカシ林 地図P45,E-5

朝見神社の境内にはアラカシやエノキ、ムクノキ、スタジイなどの高木が茂る森があります。林内にはヤブツバキ、ヤブニッケイ、クロキのほかシロダモ、アオキ、イヌビワなどの樹木やハナミョウガ、ムサシアブミ、クリハランなどの草本が生育し、自然林として良好な自然の姿が保たれています。御神木のクスノキは根回り15m、幹周りが11mあり樹木の勢いも旺盛でアラカシ林とともに県指定の天然記念物になっています。

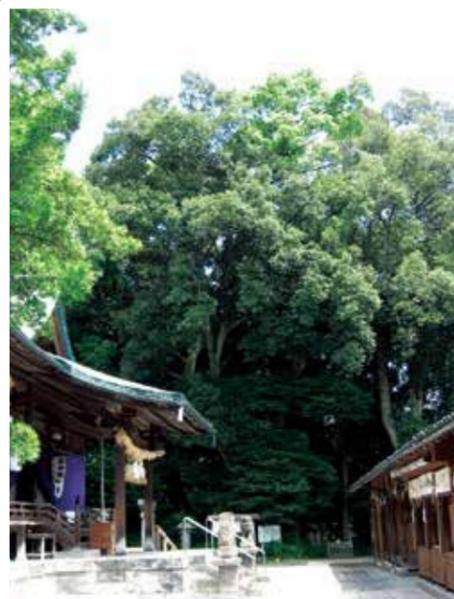


▲朝見神社の境内林

【2】鶴見権現社のイチイガシ林 地図P45,D-2

朝日中学校西側の火男火売神社下宮(鶴見権現社)の境内には、イチイガシ、スタジイ、クスノキなどの高木が茂る樹林があります。

林内にはクロキ、カクレミノ、アラカシがうっそうと茂り、低木にはヒサカキ、アオキ、ジュズネノキ、草本ではベニシダ、コヤブランが見られ自然状態が維持されています。この森は昭和50年に県の天然記念物に指定されています。



▲鶴見権現社のイチイガシ林



▲御嶽権現社のアカガシの巨木

2 湿地や棚田

生物が生き延びるために水は欠くことのできないものです。湿地はその水を十分に提供できる土地ですが、国土の中で湿地の占める割合は極めて少ないものです。別府市の猪の瀬戸湿原や神楽女湖の湿地では絶滅の危機にひんした多くの生物が生きながらえています。



▲棚田100選に選ばれた内成の棚田 地図P44 B-3

【3】御嶽権現社の自然林 地図P44,B-5

鶴見岳中腹の標高750~800mにある火男火売神社中宮(御嶽権現社)の境内には直径1mを超すアカガシの巨木が茂る自然林があります。林内にはカヤ、シキミ、ヤブツバキ、シロダモのほかウスゲクロモジ、コガクウツギが生育しています。最近、低木のアオキや草本のカシワガハグマがシカの食害で激減し、樹齢を重ねた巨木は世代交代の時期を迎えて、しだいに10~50年くらいの樹木の林に変わりつつあります。アカガシの森は大分県内でも少なく、自然状態をとどめた森として県の天然記念物に指定されています。



▲多様な生物が生きる神楽女湖 地図P44,B-3

また、内成地区では標高差約200mの斜面に築かれた棚田を見ることができます。南向きの斜面を利用して水田耕作をしており、日本の棚田100選に選ばれましたが、田の形状が複雑で大型耕作機械の導入が難しく、地域の人々が協力し共同作業で米作りをしています。

くらの
人々の暮らしと里山の自然

3 ススキ草原で生きのびた草花

火山性草原と野焼き ー大陸系遺存植物ー

阿蘇・九重から続く由布岳山麓、天間の草原は古くから牛馬の放牧地として利用されてきました。そこには春先に行われる野焼きによってススキ草原が維持され、中国大陸東北部（かつての満州）と共通するキスミレ、ヒメユリ、ヒゴタイなどの植物が生育しています。それらは日本列島が大陸と陸続きであった時期に分布域を広げた種で、大陸系遺存植物とよばれ日本列島の成り立ちを知る上で貴重な植物です。

ザ・野焼き

ススキ草原を維持するためには、早春の野焼きが必要です。そのための防火帯づくりや、傾斜地での火入れ作業は危険をとまいません。年々高齢化が進む畜産農家ではボランティアの協力を得て野焼きを行ってきましたが、人手の足りな

い地域では原野の大部分に牧草を植えて人工牧野（家畜のエサを植えた草地）に変えています。人工的につくられた牧野になると、貴重な大陸系遺存植物は消滅することになります。

※令和元年度に猪の瀬戸湿原が別府市生物環境保護地区に指定されました。

野焼きに取り組む人々

野焼きで燃え上がる炎



別府市内に生育する大陸系遺存植物



▲ ヒメユリ(ユリ科)
湿った草地で初夏の頃開花



▲ エヒメアヤメ(アヤメ科)
やや乾いた草地で春に開花



▲ タンナトリカブト(キンポウゲ科)
林のまわりで秋のはじめ頃開花



▲ ウメバチソウ(ユキノシタ科)
ササ草地で秋に開花



▲ キスミレ(スミレ科)
春のはじめ野焼き後に開花



▲ ミシマサイコ(ガガイモ科)
秋の初め頃草地で開花



▲ ツシマママコナ(ゴマノハグサ科)
秋に乾いた草地の周辺で開花



▲ ヒロハヤマヨモギ(キク科)
秋、乾いた草地で開花



▲ ヒゴタイ(キク科)
秋に開花、盗掘採取で激減



▲ チョウセンスイラン(キク科)
湿地で秋に開花



▲ ホソバオグルマ(キク科)
湿った草原で秋のはじめ開花



▲ オタカラコウ(キク科)
湿地で秋に開花

くらの 人々の暮らしと里山の自然

4 里山の動物



三ホンアナグマ

地球に生物が誕生して40億年、生物は氷河期など大きな環境の変化に適応しながら進化し、種を分化させてきました。

しかし有史以来、すでに絶滅した種も数多くあり、今現在も絶滅は進行中です。それは、人類の活動が他の生物に影響を与えているからです。文明の発達が自然環境を壊し生態系を狂わせ、生物種が絶滅に追い込まれています。

里山から追われる動物たち

人里の周辺の自然は、農林業などの営みにより長い年月の間、影響を受け続けた結果、ある生態系が形作られました。その生態系が形成された山を里山といいます。

かつての日本にはどこにでも見られた里山が住宅地や町へと変わり、人々の暮らしは自然から遠ざかってしまいました。

また、自然に対する人の働きかけが減ったことで、田園地帯の里山やススキ草原などが管理されず放置されることとなり、その環境変化により生物種の生存が危機的な状況になっています。絶滅が危惧される種の約5割はこの里山(里地)に生息すると言われています。



▲ ヒグラシ



▲ ナミハンミョウ



▲ ゲンジボタル



▲ コガネグモ



▲ アカテガニ



▲ ミナミメダカ



▲ トノサマガエル



▲ アカハライモリ



▲ ニホンマムシ



▲ ツバメ



▲ カヤネズミ



▲ ホンドタヌキ

別府で見られる外来種の動物

観賞魚として輸入された南アメリカ原産のグッピーが別府の川で見られるようになり、その後アフリカ原産のテラピア類も河口付近で群泳しているのが見られます。貝類ではヨーロッパ原産のサカマキガイやタイワンカワニナ、甲殻類ではアメリカザリガニ、爬虫類ではペットとして売られていた、通称ミドリガメと呼ばれるアカミミガメが別府の川や池などに生息するようになりました。鳥類では、ソウシチョウやガビチョウが山地で見られるようになり、哺乳類では市街地でチョウセンイタチが見られるようになりました。



在来種のメジロ

外来種のソウシチョウ

ミノムシ (ニトベミノガの幼虫)



ミノムシは蛾の幼虫のことで、枯れ葉や枯れ枝を糸でつないで、袋のような巣(ミノ)を作って枝からぶら下がっています。昔、雨具としてつかわれたミノに似ていることからミノムシとよばれるようになりました。このミノムシも見ることが少なくなりました。

カワアナゴ

西日本の太平洋側の川の下流から河口域にかけて生息するスズキ目の淡水魚で、日中は石の下などに隠れ夜に活動するようです。このカワアナゴは市内では内籠の温水池に古くから生息しています。アナゴという名が付いていますが、アナゴとは関係なくハゼの仲間です。この温水池で捕獲されたものが平成天皇の研究論文の標本となったことで地元には知られています。



見てみよう

別府のはじまり 旧石器時代

今から2万5千年前頃から別府にも人が住み始めるようになりました。当時の気候は大変寒く、氷河時代といわれていました。そのため、海面は



▲羽室遺跡の旧石器



今よりもかなり低く、瀬戸内海は陸地となっていました。そこには、ナウマンゾウやオオツノジカなどの動物が多く生息していました。この頃を旧石器時代と呼び、別府市内では羽室遺跡から狩りの道具である石器が見つかっています。

縄文時代

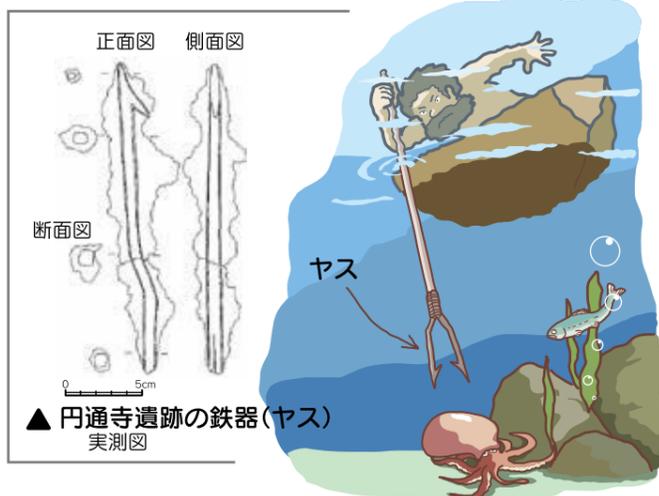
約1万年前頃には、今と同じ気候となり、瀬戸内海も海になりました。この頃、人々は土器を作るようになりました。最初の土器は尖り底で、市内では十文字原や野田地区で見つかっています。この時代を土器の文様から縄文時代と呼んでいます。羽室遺跡では、この頃の住居の跡が発見されました。



▲十文字原出土石鏃 実測図
▲扇山遺跡の縄文土器 実測図

弥生時代

次の弥生時代は、稲と金属が朝鮮半島から伝ってきました。羽室の丘や春木地区一帯には、小さな村ができました。また、別府大学にある円通寺遺跡では、沢山の土器のほか、鉄の道具がみつかっています。



▲円通寺遺跡の鉄器(ヤス) 実測図

鬼ノ岩屋古墳群と実相寺古墳群



鬼ノ岩屋1号墳



▲鬼ノ岩屋1号墳石室内壁画



▲鷹塚古墳

6世紀の終わり頃、別府には地方の有力者の墓である古墳が数多く造られています。その代表が北石垣地区の鬼ノ岩屋古墳群と実相寺古墳群です。これらの古墳は、大分県の中でも大きく、当時の別府の豪族の力を示しています。とくに、鬼ノ岩屋1号墳、2号墳は大きな横穴式石室(墓室のこと)をもっており、その壁には装飾文様が描かれています。それは、古墳の主の身分の高さを表しています。

実相寺古墳群のうち、次郎塚古墳の中からは、馬具の鏡板が見つかっています。これは唐草文のある立派なもので、朝鮮半島から伝えられたものといわれています。鷹塚古墳は、最近の発掘によって、その形が方墳であり、その中の横穴式石室も大分県で最大のものであることがわかりました。この古墳の主は、当時大分最大の豪族であったと思われます。

大分県で最古の墓地

見てみよう

十文字原高原から約9000年前の縄文時代早期の墓地が見つかっています。墓は土を掘り凹めてその上に小石を覆ったものですが、3基のうちの一つは、その周りを大きな平石で囲うようにしていました。また、墓の中や上から石器が出土しましたが、これらは死者が生前愛用したものであると考えられます。一緒に出て来た土器によって、この墓地は大分県で最古の墓地であることがわかりました。



十文字原第1遺跡 配石墓 実測図
現在は実相寺古代遺跡公園内(地図P45,E-2)に移設

調べてみよう

旧石器、縄文時代に狩りの道具の材料である黒曜石は、どこから運ばれてきたのかな?



ひめしま 姫島黒曜石の原石



ひめしま 姫島黒曜石の断崖



主な黒曜石の産出地

観光の歴史

地獄のうつりかわり



地獄は、温泉と同じものなのですが、その中でも高い温度で勢いよく噴き出して、まわりに草木も生えないような様子を見て、人々は昔から

地獄と呼んできました。別府だけでなく全国各地の山あいの温泉地でも、地獄と呼ばれるところはいくつもあります。

別府には多くの地獄があります。そのうち今でもある海地獄や坊主地獄、血の池地獄などは古くから知られていましたが、地獄が観光名所となるころに、施設を整備して地獄として売り出したものに、鬼石坊主地獄、白池地獄、鬼山地獄などがあります。また、間欠泉で知られる龍巻地獄は大正12年に地震により突如噴き出した地獄です。

また、以前はあったのですが、今はなくなった地獄に、八幡地獄、前八幡地獄、鶴見地獄(いずれも今の南立石小学校の近く)、三日月地獄(観海寺)、堀田地獄(堀田)、今井地獄(竹の内)、照湯地獄(今の坊主地獄の近く)、鉄輪地獄、無間地獄、金龍地獄、雷園地獄、十万地獄(鉄輪)、竈地獄(もと血の池地獄の向かいにありました)などがありました。



① 竈地獄 (昭和初期)



② 鶴見地獄 (昭和初期)



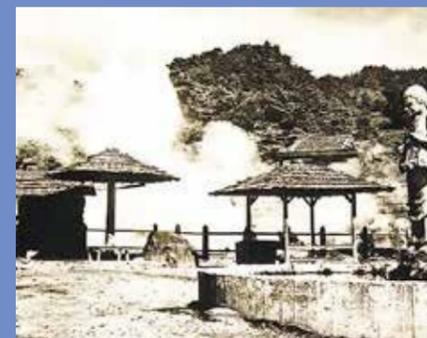
③ 八幡地獄 (昭和初期)



④ 今井地獄 (大正～昭和初期)



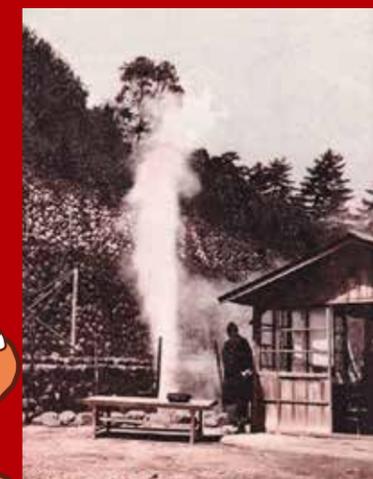
⑤ 照湯地獄 (昭和初期)



⑥ 雷園地獄 (昭和初期)



★● なくなった地獄 ★● 今もある地獄と温泉



⑦ 龍巻地獄 (昭和初期)



⑧ 紺屋地獄

考えてみよう

どうして地獄がなくなったり、新しくできたりするのかなあ？



龍巻地獄なんかは地震の後にいきなり噴き出したということだし…。

雨水が地下に浸みこみにくくなったり、温泉を掘りすぎたりすると、地獄や温泉の元となる熱水がたまりにくくなるのじゃな。また、地震などの地殻変動によっても熱水の通り道がふさがれたり開いたりもするので、地獄がなくなったり新しくできたりするのじゃよ。温泉や地獄は無限にあるわけではないので、大切にせんといかんの～。

観光の歴史

地獄めぐりのはじまり



▲現在の海地獄
地図P45.D-2

▲昭和初めの海地獄

別府には、昔から多くの地獄が知られていましたが、作物が育たなかったり高温でやけどをするため、どちらかというところあまり歓迎されていませんでした。しかし、遠くから入湯に来る人々は、地獄独特の珍しい景観を見学するようになりました。

明治43年(1910年)、海地獄が施設を整えて2銭の入場料を取るようになりました。思いのほか入場者が多かったため血の池、坊主など、ほかの地獄でも入場料を取るようになり、人々はいくつかの地獄を回って見学するようになりました。これが地獄めぐりのはじまりです。

▼ハイヤー会社



大正の別府観光事情

それまでの人力車と、新しく営業を始めたハイヤー。



地獄めぐりバスの運行

地獄めぐりがはじまったころ、人々は別府駅などから徒歩や人力車などで地獄へ行っていましたが、多くのお客さんを早く多く送るために、大正6年(1917年)に九州自動車が高ヤー(予約制の高級タクシー)を運行しました。バスではありませんが、これが地獄めぐりバスのはじまりと言えます。

▼地獄めぐりをする女優



▲地獄めぐりバス ▼地獄めぐりバスのりば



別府を訪れる人がぐ〜んと増えたんだ。



大正9年には6人乗りの自動車が行けました。しかし、増え続ける観光客、とくに団体客の輸送に足ることができなくなりました。そこで別府観光の父と呼ばれた油屋熊八が、昭和3年(1928年)に亀の井自動車株式会社を設立し、25人乗りの外国製バス4台を購入し、日本初といわれる少女バスガイドによる地獄めぐりバスを運行しました。これが本格的な地獄めぐりバスの始まりです。

昭和はじめの別府観光事情

地獄めぐりバスが登場するとハイヤーの人たちは猛反対。



別府八湯の歴史

特色や場所によって温泉地を8のグループに分けて別府八湯といます。
べつ ぶ おん せん

別府温泉

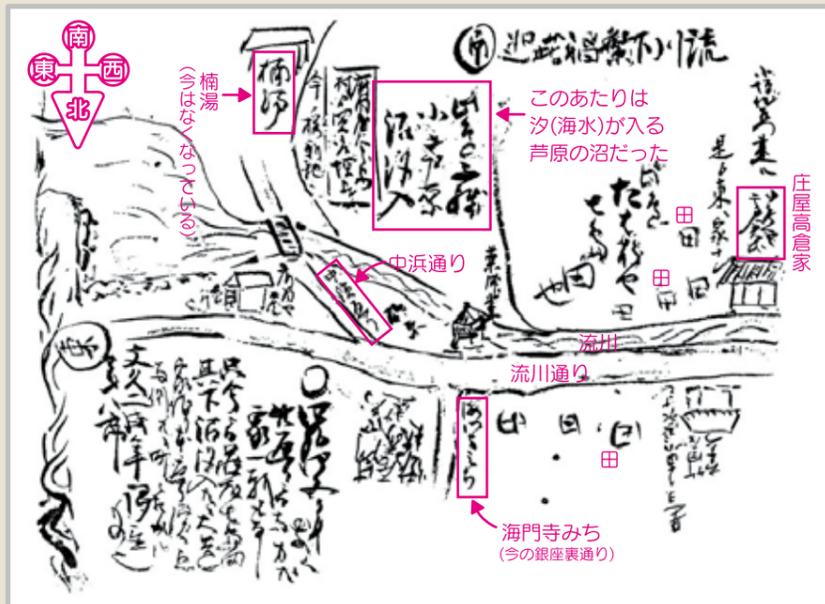
幕府領だった別府は、他の村にくらべて最も人口の多い村でした。元禄時代に福岡藩の学者貝原益軒が、別府村を訪れて次のように書いています。「…別府は民家が五百軒ばかりで、温泉のある家が十ヶ所ある。庄屋の家にある温泉は、ことに澄みきっている。宿の客以外に入浴するものはないので、入浴数も時間も自由である。他の騒しい温泉地と違って静かである。町を流れる川の岸に温泉が湧き出ていて、朝晩里の男女が入浴している。また海中にも温泉が湧き出ている。…」

江戸時代の後期になると流川の下流に内湯がある旅籠ができて近



▲竹瓦温泉 地図P45,F-4

くの村からも湯治客が訪れました。内湯がある21軒の旅籠は、ほかに宿屋を増やさないために湯株(温泉をもつ権利)をもうけてむやみに内湯を掘ることを禁じました。



諸用留 流川の図

諸用留は、江戸時代の豪商荒金義八郎がさまざまな出来事などを日記のように書き残したものです。この図は流川が賑わっていた江戸時代の終り(1862年)に荒金義八郎が、その45年ほど前の1817年前後の流川を思い出して描いたものです。

川は流川で、川に沿った道が流川通りです。楠湯があります。その頃には田であったり、海水が入り込むような沼地であったことがわかります。

楠の大木の根元にあった楠湯や不老泉・永石湯は共同浴場で入湯客で賑わっていました。明治になって竹瓦温泉や不老泉、今はない霊潮泉が建てられました。霊潮泉



▲不老泉 (明治時代) 地図P45,F-4



▲駅前高等温泉 (昭和初期) 地図P45,F-4



▲霊潮泉 (大正末頃)



▲竹瓦温泉内の砂湯 (昭和40年代)



▲永石温泉 (昭和50年代) 地図P45,F-5

唐破風で御殿造の堂々とした竹瓦温泉は別府の温泉を代表する建物です。普通の浴槽と砂湯があります。以前は流川の河口の北と南に砂湯

がありました。海岸の埋め立てによって海岸の砂湯は無くなりましたが、竹瓦温泉内には残っています。他に田の湯温泉や海門寺温泉があります。

別府八湯の歴史

はま わき おん せん 浜脇温泉

地図P45,F-5

浜脇の湯はその昔、「吐呂の湯」とよばれ、薬師堂には平安時代に造られた薬師如来像がまつられています。浜脇の地名は海岸の砂浜に温泉が湧き出ていたので「浜湧」となったそうです。

朝見川の河口に波止場があり、漁港のほかに年貢米や七島表などの産物を積み出す港として栄えていました。多くの湯治客は近所の木賃宿（食事がなく泊まるだけの宿）に泊まって、漁師や農民から魚や野菜を買って自炊をしていました。浜脇温泉のおみやげは竹かごやざる・簾でした。

浜脇も別府も海岸の温泉は満潮の時には排水口から海水が逆流して、お湯には入れないことがあり、小



▲ 豊後州速見郡濱湧温泉場賑之図 (明治14年 別府市美術館)

魚が泳いでいたこともありました。浜脇は東の湯と西の湯を中心に町ができました。後に東と西の湯をひとつにして、オランダ式の鉄

筋コンクリートの浜脇高等温泉ができましたが、平成3年(1991年)に建てかえられて、健康管理を目的とする「湯都ピア浜脇」がオープンしました。

かん かい じ おん せん 観海寺温泉

地図P45,D-4

高台で晴れた日には四国まで望める見晴らしのよい場所にあります。温泉の名前は、むかし仁聞菩薩が開いたといわれる観海寺にちなんで付けられたといわれます。朝見川上流の温泉地で、江戸時代には別府や浜脇の湯治客が日帰りで見物にでかけました。江戸時代から続いた湯治場でしたが、昭和6年(1931年)の大火災で全焼しました。温泉地として復興したのち、戦争中は軍隊の保養地になりました。

現在は杉乃井ホテルが温泉を利用したレジャーランドになり、多くの観光客が集まるようになりました。



▲ 杉乃井ホテル・棚湯



▲ 明治39年建築の浜脇西温泉 (別名 清華泉)



▲ 昭和3年建築の浜脇高等温泉



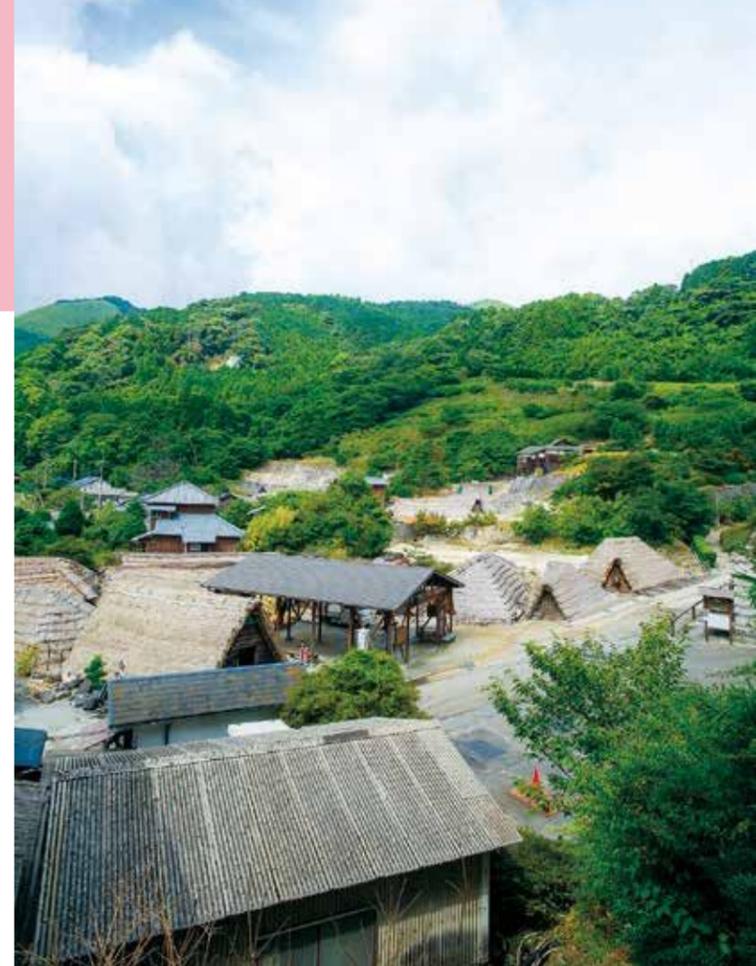
▲ 平成3年建築の湯都ピア浜脇

明礬温泉

地図P44.C-1

明礬温泉は、所どころで高熱の蒸気を噴き上げており、硫黄のにおいが鼻をつきます。お湯も白く濁った硫黄泉です。

江戸時代には、噴気を利用して明礬が作られるようになりました。明礬の生産高は日本一でした。また鍋や山で硫黄を採集して、明礬とともに出荷していました。



▲ 明礬温泉 湯の花小屋

▼ 湯の花小屋の内部



明治時代になって明礬が売れなくなり、代わりに原料だった湯の花が入浴剤として使われるようになりました。湯の花小屋で湯の花を製造する技術は、国の重要無形民俗文化財に指定されました。



▲ 湯の花の結晶

行ってみよう！ 見てもみよう！

湯の花小屋

別府市明礬(亀の井バス明礬バス停) 入場無料

明礬地区には見学小屋もあって、間近で観察できるよ！

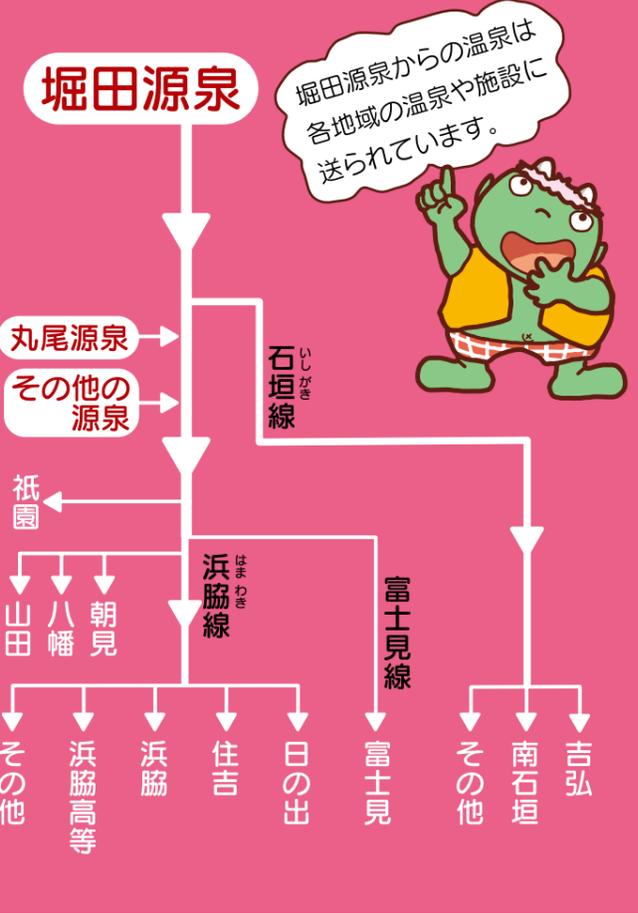


高温の噴気が通る溝など、湯の花ができるしくみがわかる。



▲ 堀田源泉

堀田源泉は 湯の街別府の縁の下の力持ち！



堀田源泉からの温泉は各地域の温泉や施設に送られています。

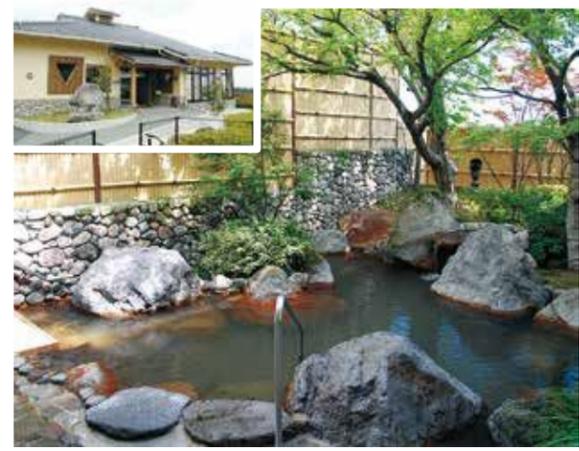
堀田は温泉の湧出量が多いので他の温泉地に給湯しています。

石垣原の戦いのときの大友軍の陣の場所に「鐘かけの松」がありました。ここからは石垣原が一望できます。

別府八湯の歴史

堀田温泉

地図P44.C-4



▲ 堀田温泉

別府の西の入り口にあたる立石村に開けた温泉地で、江戸時代から人通りの多い場所でした。

村の記録によると、ヒゼンやカサなどの皮膚病によくきく、「蛤の汁」のように淡泊な温泉と書かれています。今の堀田温泉も昔と変わらずこんこんと湧き出ています。

旧西温泉跡には旅館の前に敷き詰められた石畳の道が今も残っています。



▲ 大正時代の堀田温泉

別府八湯の歴史

鉄輪温泉

地図P45.D-2



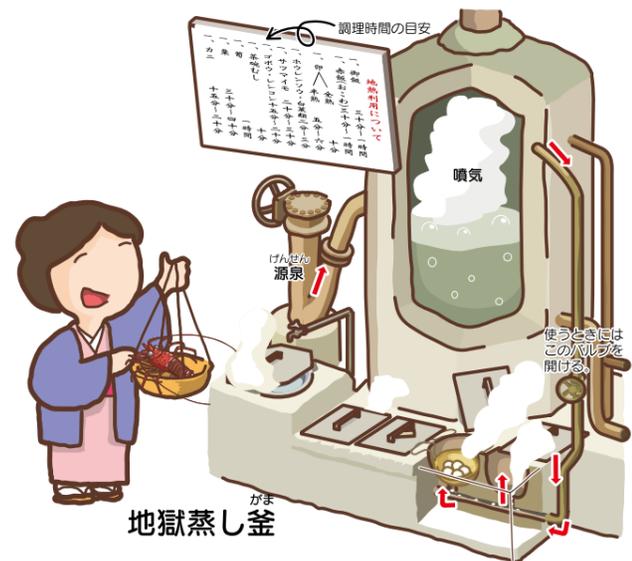
鉄輪温泉の湯けむり

鉄輪温泉は地獄地帯にある古い温泉地です。奈良時代に書かれた豊後国風土記に勢いよく噴き上げる玖倍理湯という地獄のことが書かれています。現在でも透明や青・白色のさまざまな地獄があり盛んに噴煙を上げています。



むし湯 敷きつめられた石莖の薬効と噴気で神経痛、喘息などに効果があります。

鎌倉時代に一遍上人が荒れ狂う鉄輪の地獄を鎮めて永福寺を建てました。むし湯も一遍上人が温泉の蒸気を使って工夫したといわれています。鉄輪では地獄蒸しといって食材を熱い噴気で蒸して調理ができます。毎年9月に一遍上人に感謝する湯あみ祭りがあります。



地獄蒸し釜

鉄輪温泉ではホテルや旅館のほかに入湯貸間旅館があり、宿の内湯で湯治するか、熱の湯や渋の湯のような共同浴場を利用して、自炊しながら長く滞在する人がいます。

鉄輪温泉街の中央を通る「いで湯坂」には宿屋や日用品、お土産を売る商店が建ち並んで、湯治客でにぎわう温泉地になっています。

地獄地帯では、温泉が突然、田

んぼの中で吹きだしたり、溜め池や田圃に流れ込んで農業に被害を与える厄介ものでしたが、現在では観光資源として役立てるようになりました。

鉄輪温泉からいくすじも立ち上る湯けむりの眺めが素晴らしいので、「別府の湯けむり・温泉地景観」が国の重要文化的景観に選定されました。

行ってみよう！ 見ってみよう！

▲ 地獄蒸し工房 地獄蒸し

▲ 永福寺 永福寺

▲ 鉄輪むし湯 鉄輪むし湯

▲ 湯あみ祭り (9月) 鉄輪を開いた一遍上人に感謝する祭。

▲ 湯雨竹 湯雨竹

▼ 海地獄 海地獄

▼ 坊主地獄 坊主地獄

▼ 足蒸し 足蒸し

▼ 源泉 源泉

別府八湯の歴史 亀川温泉

地図P45.E-1

江戸時代のなかば頃、関の江に八町堤という潮止めの堤防ができて、海岸の道が通りやすくなりました。

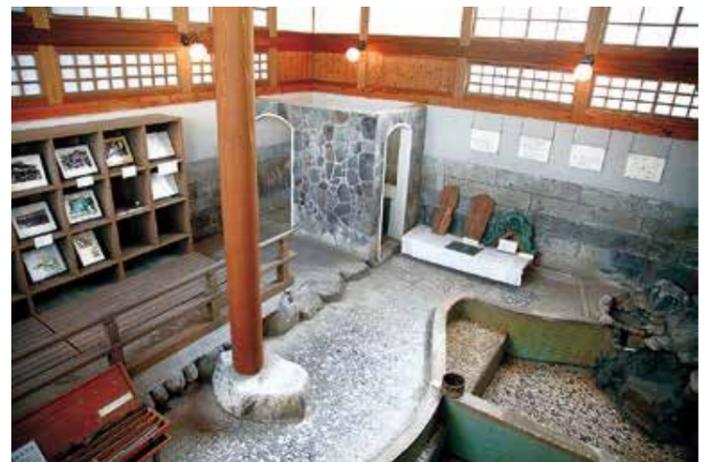
亀川は温泉の湧出量が豊富でたくさんの浴場があります。亀陽泉から四の湯温泉まで旅館や商店が並ぶにぎやかな中央通があります。

戦時中、別府の温泉地には海軍や陸軍の病院ができました。別府医療センターは海軍病院でした。

浜田温泉の真向にある唐破風の玄関の建物は、浜田温泉資料館といい国の登録有形文化財になっています。



▲ 浜田温泉 地図P45.E-1



▲ 浜田温泉資料館

地図P45.E-1

昭和10年に建てられた別府市にある木造温泉施設としては最も古い。平成14年に今の浜田温泉が新しく建てられたので、温泉の資料館として保存されています。



◀ 亀陽泉 地図P45.E-1

平成28年にバリアフリー化されて建て替えられました。のれんのロゴマークは地元の中学生在がデザインしました。



▲ 明治時代の亀川砂湯



別府八湯の歴史 柴石温泉

地図P45.D-1

柴石川の溪流にそった温泉地で、むかし天皇が病氣治療で入湯したという伝説があります。江戸時代に柴の化石が見つかったので柴石と名付けられたといわれています。秘境とよばれていた温泉地で、江戸時代には湯船の近くまで鹿がのぞきに来ることもある、のどかな湯治場でした。



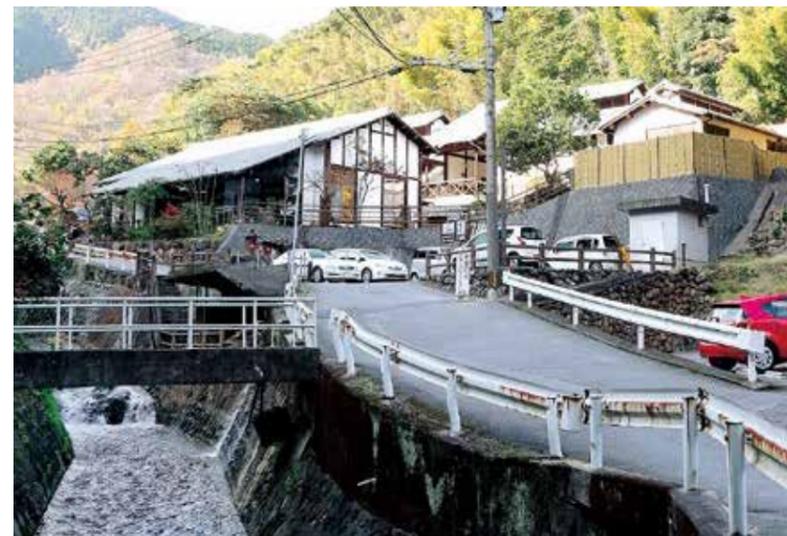
▲ 昔の柴石温泉

温泉は1ヶ所ですが、温度の違う2つの浴場と露天風呂もあり、かつては柴石川の川岸に滝湯もありました。

柴石は自然に恵まれた温泉地で、鉄輪・明礬とともに国民保養温泉地・国民保健温泉地に指定されています。



▲ 柴石温泉の露天風呂



▲ 柴石自然ふれあい温泉館

今も残る温泉建物

別府駅前高等温泉

地図P45,F-4

この温泉建物は、大正15年(1926年)に地元の有志が力を合わせて建設しました。当時としては珍しいイギリスの民家を想わせる柱や斜材を外部に配置したハーフチェンバーと呼ばれる型式の建物です。異国情緒を感じさせるスッキリとした温泉建物として市民や観光客の注目を集めました。



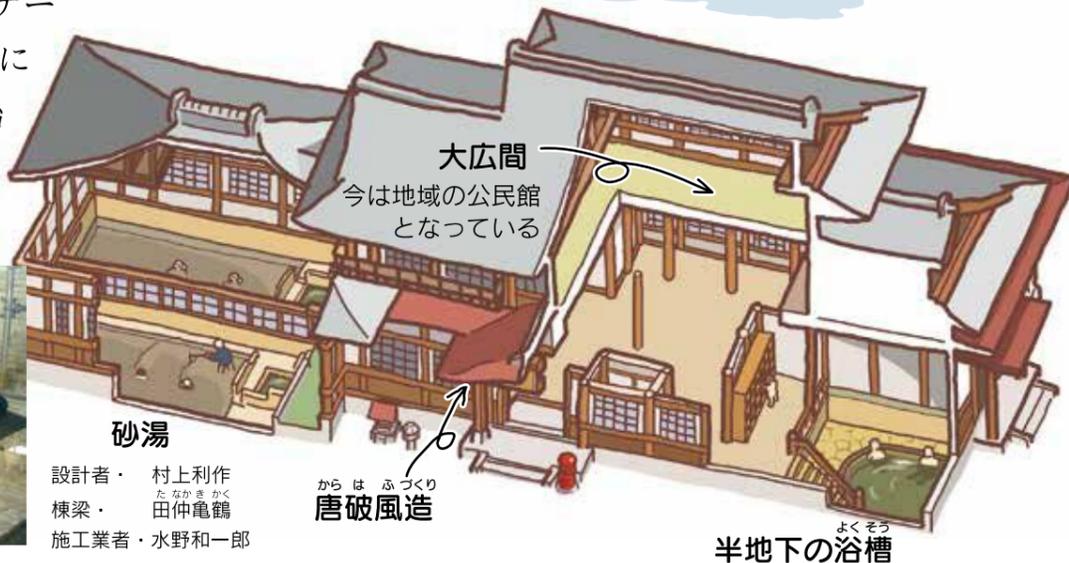
現在も残る温泉建物としては、別府市で最も古いものです。

竹瓦温泉

地図P45,F-4

明治12年(1879年)の創設で、乾液泉と呼ばれていました。もとは、屋根を割竹で葺いていたことから「竹瓦の湯」→「竹瓦温泉」と呼ばれるようになりました。現在の竹瓦温泉は昭和13年(1938年)に建てられたものです。1階部分のホールで砂湯と男湯、女湯に振り分け、2階の広間は格天井でステージ付き、高欄に囲まれ、湯治客の憩いの場でした。

この建物は、平成16年(2004年)国登録有形文化財になっています。



設計者・村上利作
棟梁・田仲亀鶴
施工業者・水野和一郎

唐破風造

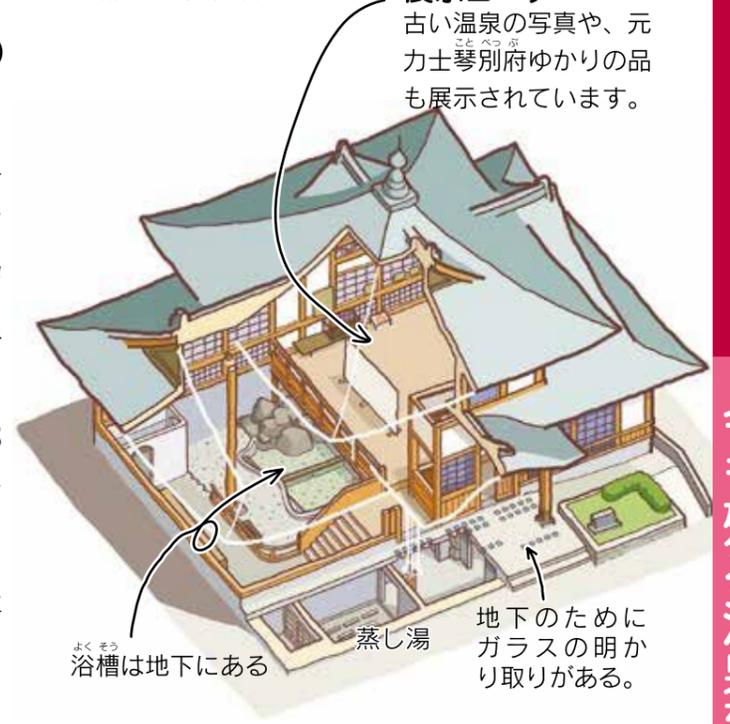
半地下の浴槽

浜田温泉資料館

地図P45,E-1

浜田温泉は、明治12年(1879年)地元の高橋増吉が温泉を開掘したのが始まりとされています。その後大正9年(1920年)ごろ町が木造2階建てに改築しました。さらに、昭和10年(1935年)に、現在の旧浜田温泉(資料館)が建てられました。浜田温泉は老朽化のため平成15年(2003年)解体しましたが、篤志家の寄付金により、資料館として復元されました。平成18年(2006年)、国登録有形文化財になっています。

設計者・池田三比古(別府市建築技師)
工事請負人・小嶋豊吉



展示コーナー
古い温泉の写真や、元力士琴別府ゆかりの品も展示されています。

浴槽は地下にある

蒸し湯
地下のためにガラスの明かり取りがある。

寿温泉

地図P45,F-5



理髪店の床下に湧いていたので「床下の湯」とも呼ばれていたこの温泉を、地元の有志が浴場に改造したのが、明治32年(1899年)。その後、別府市に市制が施行された大正13年(1924年)に、温泉都市の発展を願って建替られました。建築費7286円を投じてモダンな洋風建築に改築され名称を「寿温泉」と名づけました。今は、当時の面影は薄れています。

永石温泉

地図P45,F-5

江戸時代から病気によくきく温泉として広く知られていました。言い伝えによれば、弘法大師が空に石を投げたところに温泉が湧き出したことから「投石の湯」「握石温泉」「一夜温泉」とも呼ばれ、後に「永石の湯」となったといわれています。現在の建物は平成3年に改修されたものです。



温泉の利用

温泉は、昔から疲れをとったり、からだを休めたりするだけでなく、観光のためにも利用されてきました。また、温泉の持つ熱を利用したエネルギーの利用も進んでいます。温泉や地中の熱は、野菜や花の栽

培、コイやウナギの養殖、暖房、地熱発電などいろいろな分野で利用されています。

ほかにも、わたしたちの健康づくりやまちの発展と結びつけた施設の整備が進められています。

1 温泉を利用した観光施設

市営温泉

竹瓦温泉や鉄輪むし湯は観光客が多い施設です。最近では地域の温泉にも観光客が入れる温泉が多くなっています。



▼竹瓦温泉

▼地獄めぐり 地図P45.D-2



▲別府駅前広場の手湯のモニュメント 地図P45.F-4

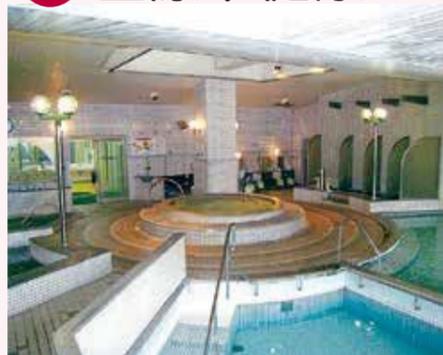
▲明礬温泉の「湯の花小屋」 地図P44.C-1



▲地獄蒸し工房鉄輪 地図P45.D-2

野菜や魚などを竹のざるに乗せて高温の釜で蒸しあげたものを食べたり、足蒸しで疲れをいやすことができます。

2 医療や健康

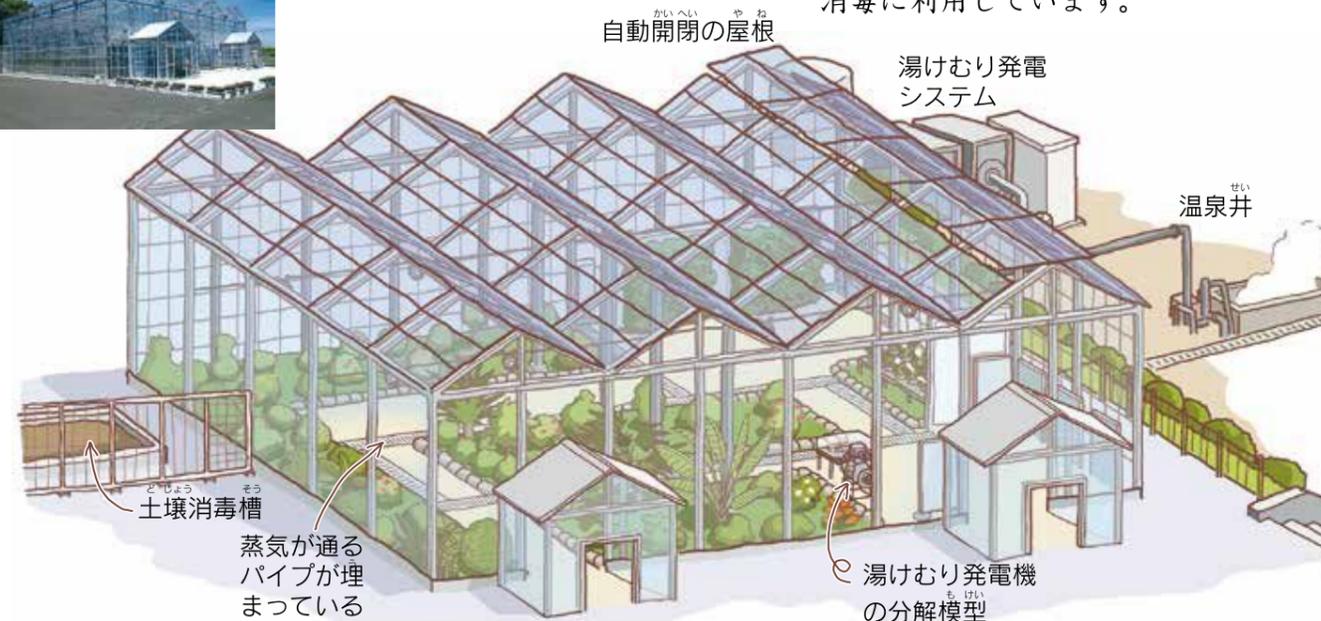


▲湯都ピア浜脇 地図P45.F-5

3 農林水産業での利用

大分県農林水産研究指導センター 農業研究部花きグループ

地図P45.D-2



大分県で花などの栽培をしている農家のための研究施設です。温泉の蒸気をハウス暖房や土の消毒に利用しています。

4 エネルギーとしての利用

杉乃井地熱発電所 (観海寺温泉) 地図P45.D-4

温泉を使った発電でホテルで使用する電気をつくっています。



このように、温泉にはさまざまな使いみちがあるだね。この財産を未来につないでいかないといけないね。



温泉を使って何かをするときは、温泉そのものの量や質だけでなく、その地域の自然や生活にどんな影響があるかをみんなでしっかり考えて、話し合っていくことが大切だよな。

はってん
別府を发展させた交通



路面電車

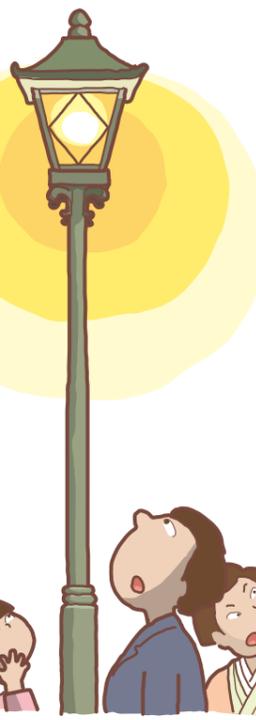
江戸時代、別府と大分を結ぶ道は、
浜脇から赤松を抜けて高崎山の裏
側を通る街道と、海岸沿いの道だ
けでした。

海岸沿いの道は狭く人や馬が海
に落ちることもしばしばありまし
たが、明治7年(1874年)に大掛か
りな工事で、幅6メ
ートルほどの道路に
生まれ変わりました。
これが現在の別大国道
のはじまりです。

明治33年(1900年)
には、この道路に大
分の堀川と別府の南

大分にもないものが
別府にはある。

電車を走らせるための電力は、現在の千代町に高い煙
突の火力発電所を造ってまかかっていました。余った電
気は街灯や一般家庭の電灯にも使われていました。



電車の速度は遅く、電車の前を人が走り、
道行く人に危険を知らせていたそうです。

◀ 開業当時の路面電車

▼ 廃止される前の路面電車



町を結ぶ路面電車が走ることとなり
ました。さらに北町(今の北浜)、境川、
亀川へと路線は延びていきました。
また、北町から別府駅まで駅前線が
結ばれたこともありました。

しかし、昭和40年頃から自家用車
が普及し始めると、路面電車は次第
に利用する人が少なくなり、昭和47
年(1972年)、70年以上にわたり親し
まれてきた路面電車は姿を消しまし
た。(上の写真)



鉄道

路面電車に遅れること11年、明
治44年(1911年)にようやく別府に
鉄道が開通しました。7月には亀川
駅と別府駅が、11月には浜脇駅(今
の東別府駅)も開業し、人々の交通
はとても便利になりました。

昭和42年(1967年)に別府駅は高
架(今のように地上高くレールを造



▲ 開業当時の別府駅舎

ること)になり、また、電化、複線
化も進み、その一方で蒸気機関車
(SL)は姿を消していきました。



かつての別府駅では、ホーム
で温泉を飲むことができる飲泉
場(写真上)や温泉洗面場(写
真下)がありました。別府温泉
ならではの風景は、駅の高架に
より姿を消しました。



行ってみよう! 見てみよう!

東別府駅

地図P45.F-5



平成14年頃、東別府駅建て
替えの計画が持ち上がりまし
たが、浜脇の住民やJR九州な
どの努力で、そのままの姿を
残すことができました。木造
の駅舎や長いホームなど、明
治時代の面影を感じることが
できます。



せんばく
港と船舶の歴史

別府築港から国際観光港

江戸時代までの港は、浜脇や亀川の小さな漁港があるだけでした。

明治4年(1871年)5月に、東西約180メートル、南北144メートルの港が建設されました。防波堤は石積みで、何度か造りなおしましたが、今でもゆめタウンの北側に跡が残っています。

このとき船の安全を祈って波止場神社が建てられ、「別府築港之碑」も置かれました。

はじめての客船は明治6年の「益丸」(18トン・漁船くらいの大きさ)で、別府と大阪の間に、月一往復で就航しました。わずか12人乗りの小さな船でしたが、これをきっかけに関西方面からの観光客が増えていくことになりました。



▲ 木製棧橋と紅丸



▲ コンクリート製棧橋と紫丸



▲ 別府築港之碑



▲ 紅丸と棧橋

せんばし
棧橋のない時代は、客船を沖に停めて荷物や人を団平船や伝馬船で岸まで運びました。これらの小型船は底が平たく人や石炭、材木などを運ぶのに適していました。

大正5年(1916年)に棧橋ができて大型船が岸に着けるようになると、これらの船はしだいに姿を消しました。

船や港のおおまかな移り変わり

年	船名	備考
明治 6年	益丸	18トン、12人乗り
8年	安全丸、金比羅丸など	
13年	山城丸	300トン
17年	大阪商船株式会社設立	
18年	宇和島運輸株式会社設立	
15~16年	運輸丸、幸運丸	初の外輪船、大阪まで3日かかった
45年	紅丸	1000トン、ドイツ船を改造 「海の貴婦人」と呼ばれ大阪まで2日に短縮
大正 3年	紫丸	1600トン
5年	木製棧橋設置	
8年	コンクリート製棧橋に改修	
昭和 9年	錦丸	
35年	くれない丸	3000トン
	第2むらさき丸	3000トン
38年	すみれ丸	こはく丸 2000トン
41年	ゆふ丸	まや丸 いずれも3500トン
	国際観光港第1埠頭完成	
42年	あいぼり丸	2000トン
55年	こがね丸	にしき丸 7000トン級
58年	うわじま2	
現在	あいぼり丸、こばると丸	9300トン級



今の別府国際観光港
地図P45.F-3

伝統産業 湯の花



▲ 明礬地区の湯の花小屋 地図P44,C-1

湯の花は明礬地区で製造される入浴剤で、湯の花小屋の中で作られます。明礬温泉あたりでは、江戸時代に豊後明礬が作られていましたが、その技術を用いて明治時代になって湯の花が作られるようになったのです。伝統的な珍しい技術が今でも守られているということで、平成18年(2006年)に国重要無形民俗文化財に指定されました。

別府竹細工



▲ 別府町浜脇町学校組合立工業徒弟学校の授業風景

別府の竹細工は、青物と呼ばれるザルやカゴなどの実用品から始まり、湯治客の温泉土産として人気が出ました。

明治35年(1902年)に別府町浜脇町学校組合立工業徒弟学校が開校し、竹カゴ作りも教えるようになりました。先生は兵庫県の有馬温泉から招かれましたが、そこでは茶道に用いる工芸品としての竹細工を作っていました。そのため、別府に高度な竹細工技術が根づきました。今でも別府は日本の竹細工の中心地のひとつとなっています。

▼ 生野祥雲齋 別府市生まれ 明治37年(1904年)～昭和49年(1974年)
昭和42年(1967年)竹工芸初の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されました。



「篠竹六ツ目編華籃」 生野祥雲齋



「湯けむり」 田辺幸竹齋



別府市竹細工伝統産業会館 地図P45,E-3
平成6年に伝統的工芸品「別府竹細工」の振興の拠点として設立された施設で、別府竹細工の歴史や技術に関する展示や名工たちの素晴らしい作品などを見学できます。竹細工の体験学習や、一般市民向けの竹細工教室も行われています。

七島藺

七島藺はカヤツリグサ科の多年草で、中国南部から台湾・沖縄が原産地です。豊後表と呼ばれるじょうぶな畳表の材料となります。大分県、それも別府湾沿岸を中心に盛んに栽培されてきました。七島藺が大分に移入されたのは江戸時代前期です。

江戸時代には別府湾沿岸の各藩は専売品として七島藺栽培を奨励したため、豊後の特産品のひとつとなりました。現在は国東市や杵築市で栽培されています。



「刈りたる藺を夜なべに製」の図 「広益国産考」三之巻



◀ 「織上げたるむしろを仕立てる」の図

「広益国産考」三之巻
七島藺は織機で筵に仕立てられ、畿内大阪や江戸方面へ出荷されました。



▲ 「大坂問屋水上商ひ」の図 「広益国産考」三之巻
大坂(大阪)の問屋に豊後から届いた七島藺を荷揚げしています。

別府つけ細工



明治時代の初めに別府でつけ櫛の製造販売が始まったと言われます。

大正から昭和にかけて、他県のサンゴ彫刻の技術なども導入しながらち密な細工物が作られるようになりました。

最盛期に比べ職人の数は大きく減少していますが、別府独自の工芸品として発展した伝統産業です。

新民謡盆踊り歌

このような古くからある伝統的な盆踊り歌以外に、別府市では新民謡と呼ばれる歌で盆踊りを踊ります。新民謡とは、昭和初期から昭和30年ころにかけて、地方の町などが依頼して作曲された、その土地の名所や名物などを歌い込んだ歌のことです。地元の人たちが気軽に歌ったり踊ったりできる古い民謡のような歌です。別府で最も有名な新民謡は「別府音頭」でしょう。西条八十が作詞し、中山晋平が作曲したもので、昭和9年にレコードが発売されています。別府の新民謡には「瀬戸の島々」「別府湯けむり」「温泉おどり」「別府八湯節」などがあります。観光都市別府らしく、さまざまな新民謡が作られたことがわかります。

別府の民謡

伝統的な盆踊り歌

お盆の季節になると、別府市内各地で盆踊りが催されます。ふるさとに帰って来た人たちも加わって盛んに踊られています。大分県では今なお音頭取りと呼ばれる人が盆踊り歌を歌います。別府も録音を使わないで、音頭取りさんが盆踊り歌を歌うことがあります。市内でよく歌われる盆踊り歌は「サエモン」「三つ拍子」「二つ拍子」「六調子」「ヤッチキ」などです。

サエモンは「左衛門」と書かれることが多いですが、本来は「祭文」と書かれていました。本来は神仏の前で述べる節をとまなう物語のようなものでしたが、歌として独立したのです。七・七・七・五調の歌であれば、どんな歌詞でも良いといわれています。



別府音頭

【一番】
 別府湯の街 ヨサコラ サイサイ
 別府湯の街 湯川に湯滝 アリヤサ
 一夜千両の ヨサコリヤ サイサイ
 一夜千両の お湯が湧く
 ハイノ ハイノハイノ
 ヨイシヨ ヨイシヨナ
 ヨイシヨ ヨイシヨヨイシヨ
 ハイノ ハイノハイ

ヤッチキ

ハアヤッチキドッコイドッコイナ
 さても大友義統さまは
 故郷豊後の速見を指して
 帰りましたまうや立石城に
 しばし足をも名もどめける
 かくと聞くより豊前の国の
 中津城主は黒田の如水
 悪に長ぜし大友屋形
 退治せんとて乗り入れたまう
 豊後横瀬鶴見のうちに
 山を小楯に陣取りたまう
 都合その勢い八千余騎の
 八千三五の二手に分かれ
 表と裏に立ち分かれゆく
 ころは慶長五年の九月
 菊の花時十三日の
 朝の卯の刻一番そらい
 続く踊りは別府の囃子
 三味や太鼓に手バチ持つて
 さあさあ輪になれ別府の踊り
 後が続けば皆続きます

別府の祭り

別府八湯温泉まつり おんせん 4月1日と4月第1週の週末 地図P45,F-4

別府駅前を中心に開催される別府で最も知られた祭りです。

昭和6年(1931年)に、それまでおこなわれていた「豊年祭り」の名前を「温泉祭り」に変えたのが



始まりです。はじめの頃は仮装行列や余興、踊りなどが主なもので、現在のように湯かけみこしなどはおこなわれていませんでした。それでも大分市などから多くの人が見物に来ていました。

現在では、扇山火まつりのほか、浜脇、松原、鉄輪、亀川の各会場でさまざまなイベントがおこなわれています。

湯あみ祭り 9月下旬 地図P45,D-2

鉄輪温泉を開いたといわれている一遍上人に感謝するため、永福寺を中心におこなわれています。

永福寺の言い伝えによると、明治時代の初めまでは湯あみ祭りをおこなっていました。その後長い間おこなわれていませんでしたが、



昭和35年(1960年)に永福寺と地元の人々により復活しました。

お祭りは、一遍上人の坐像に温泉をかけることがメインで、そのほか稚児行列や法会、もちつき大会などがおこなわれています。

浜脇薬師まつり 8月最終週の金土日 地図P45,F-5

浜脇温泉前広場にある薬師堂には、平安時代に作られた薬師如来像があります。この薬師如来をお祭りするのが薬師祭りです。薬師如来像を一般公開するほかに、風流見立て細工、花魁道中などがおこなわれます。また、いろんな屋台やお化け屋敷などもあり、毎年多くの人でにぎわっています。



海門寺の精霊流し 8月16日 地図P45,F-4

北浜にある海門寺では、海に沈んだ久光島の人々や交通事故で死んだ人の霊を弔うために、毎年お



盆の時期に精霊流しをおこなっています。使う精霊船は長さが7メートル20センチ、幅が90センチもある巨大なもので、お寺でお経を読んだあと、台車に乗せて北浜の港まで運びます。そこから船に替え、沖合い数キロメートルのところで燃やして行事は終了します。

住吉神社の海上渡御 7月下旬 地図P45,F-5

漁業の安全を願う神社として古くから信仰されてきました。神様が神社を出て海を回る行事がおこなわれますが、それを海上渡御といいます。一時中止していましたが、現在は復活しています。

住吉神社から出たみこしは、浜脇港から漁船に乗って、東別府～国際観光港を回り、別府港(北浜)へ着き住吉神社へ戻ります。船の先頭は若い男性と決まっていますが、近年では若い男性の参加者が少なくなっているそうです。



竈門神社の大名行列 地図P44,B-1

八幡竈門神社で春の大祭のときの行事で、竈門神社の神様が亀川の亀の甲で泊まるときにおこなわれていました。残念ながら現在ではおこなわれていませんが、ぜひ復活してもらいたい行事です。



朝見神社の夏越祭り 7月末の土日 地図P45,E-5

夏越祭りとは夏の間には病気が流行ったりするのを防ぐためのお祭りです。以前は、ちょうちん祭りといって、朝見神社から住吉神社までちょうちんを飾っていましたが、危ないということでやめられました。

現在の火の海まつりはこの伝統的な祭りや現代的なイベントを融合したもので、火の海まつりの開始は、昔ながらの朝見神社の献湯祭からはじまります。

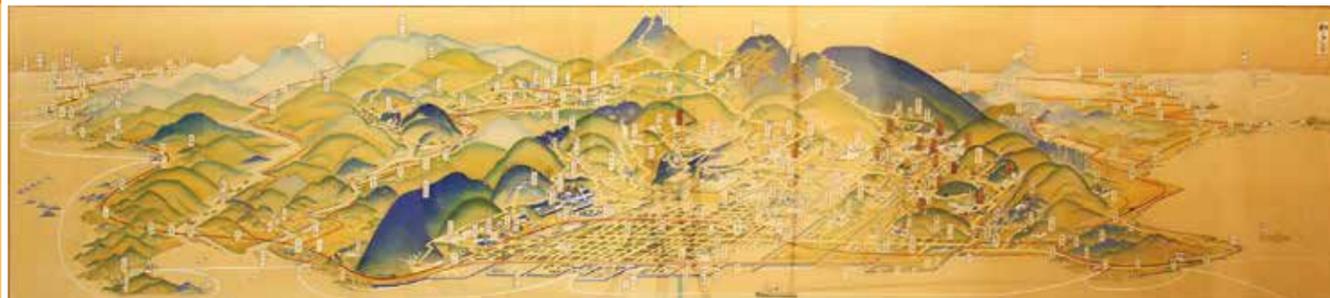


別府を描く

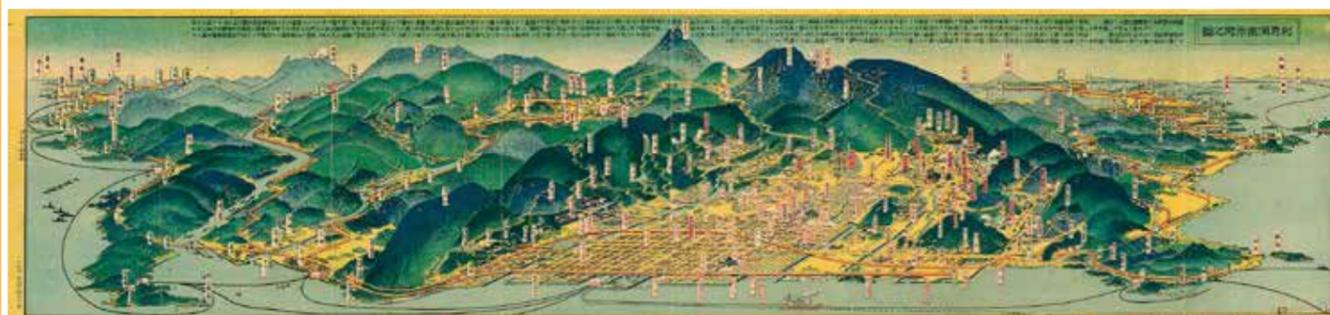
温暖な気候で青い海と緑の山々に囲まれ、豊富な温泉が湧く別府には、古くから数多くの画家たちが訪れています。特に別府では、

美術は広告やデザインに取り入れられ、「国際観光温泉文化都市別府」を国内外に発信する役割を担いました。

パンフレットになった別府



▲ 吉田初三郎《別府鳥瞰図》(1924年/絹本着色/50.0×225.5cm)



▲ 《別府温泉市街の図》(別府市西海印刷社/17.6×76.7cm)

明治時代から大正時代にかけて、別府では鉄道が開通し、駅が開業し、観光客船が就航するなど、公共の交通網が整備・拡大され、公衆浴場が新設されました。そのため、多くの観光客が別府を訪れるようになり、観光温泉地として知られるようになりました。

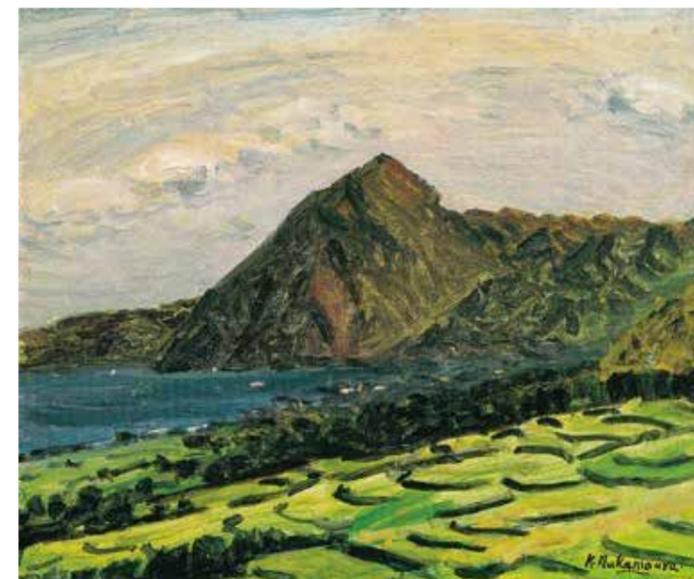
別府の魅力を広く伝えるきっかけとなったのが、吉田初三郎(1884年～1955年)の鳥瞰図です。鳥瞰図とは、空を飛ぶ鳥の目から見たように、高い位置から見おろして表

現した図のことです。《別府鳥瞰図》では、横長の画面の中央に別府の街を描いています。温泉、神社、公園といった観光地や、観光地と観光地を結ぶ幹線道路、列車が通る鉄道と停車駅、船が行きかう航路などがこまかく記されています。遠くには、実際には見えないはずの長崎県や沖縄県、海外の朝鮮半島や台湾まで描かれています。

別府では、この鳥瞰図をもとに宣伝用パンフレットや観光の案内地図などが作られました。

切手になった別府

昭和24年(1949年)、観光切手「別府」が発行されました。当時の逓信省(現在の日本郵便)が企画した「名勝地切手」シリーズです。第二次世界大戦後初めての観光切手に別府が選ばれたのです。切手の原画を担当した画家の中村研一(1895年～1967年)は、実際に別府を訪れて、さまざまな場所から別府の風景を描きました。



▲ 《高崎山》中村研一
(1948年/油彩・キャンバス/38.0×45.0cm)

《高崎山》は、原画の一枚です。高崎山を背景に、別府湾に入港する汽船を描いています。高崎山や田園の深い緑と別府湾の群青、そして観光地であることを表す客船が印象に残ったのでしょうか。

当時は、はがきに2円切手、封書に5円切手を使用しました。これらの切手は別府郵便局と東京の麻布郵便局から発売され、翌年、全国で発売されました。別府の次に京都が予定されていましたが、事情があり、観光切手は打ち切りとなります。そのため、この切手は最初で最後の「名勝地切手」となりました。



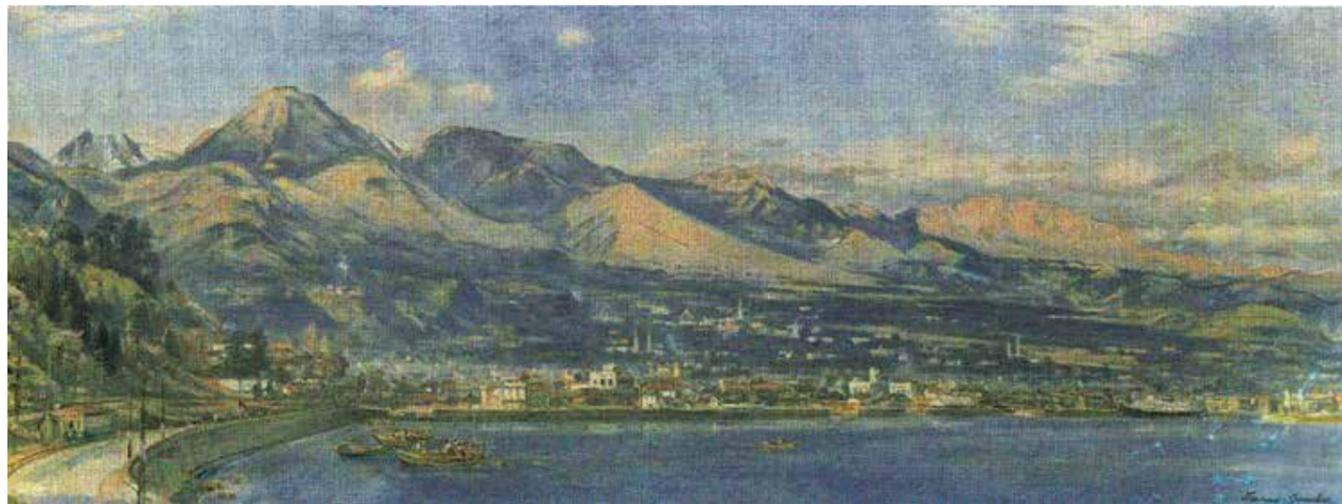
▲ 観光切手「別府」(1949年発行)

別府を描く 絵になった別府

自然は、季節の移り変わりや時間の経過によって絶えず変化します。画家は、それまで気づかなかった美しい風景と出会い、その感動を作品にします。多くの画家たちが

絵筆を取り、それぞれの別府の風景を描いてきました。画家の心を伝える筆使いや色、形、構図などを通して、わたしたちはその感動を追体験することができます。

春の別府



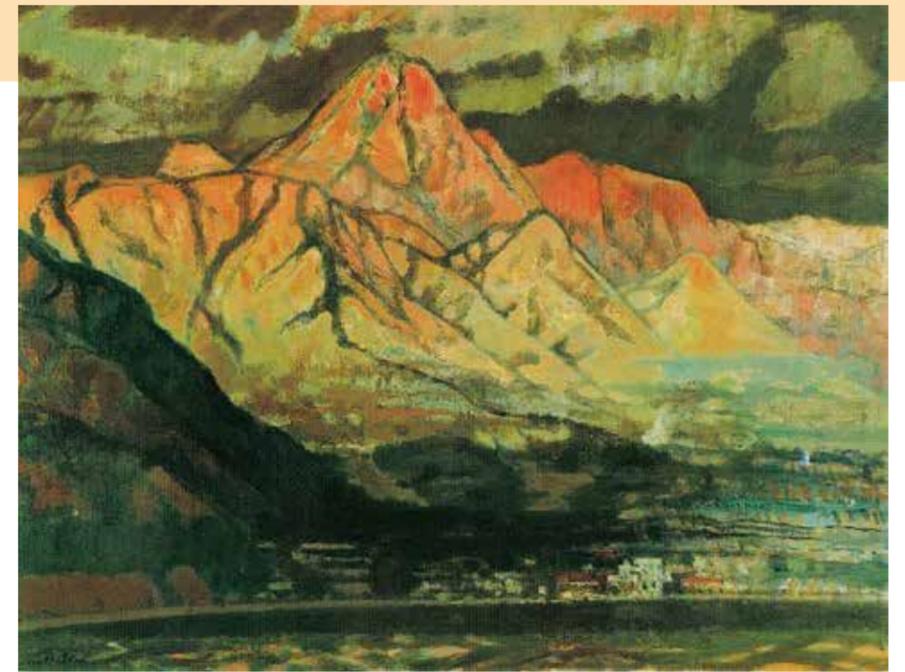
▲ 権藤種男《別府遠望》 制作年不詳/油彩・キャンバス/40.5×106.5cm

大分県出身の画家、権藤種男(1891年～1954年)は、パノラマ写真のような横長の画面に別府を描いています。《別府遠望》では晴れわたった青空には白い雲がうかび、山々は早春のやわらかな陽光を受けています。雄大な山並みを背景に、別府湾に停泊する客船、小型船で漁をする人々、海岸沿いの線路を走る電車など、そこに生きる人々

の日常の様子が描かれています。当時は、高い建物や家が少なく、田畑や樹木が多かったことがわかります。少し山側に傾く白い湯けむりが、海からふくおだやかな風を感じさせます。別府ののどかな風景は、戦争を体験した権藤にとって、安らぎや平和を象徴する風景だったのかもしれませんが。

早朝の別府

伊谷賢蔵(1902年～1970年)は、日本の山を描いた画家です。複数の火山のように岩から造られた、険しくそびえる山々に強く心を引きつけられ、九州の山岳風景を多く制作しました。



▲ 伊谷賢蔵《別府朝焼》 1955年/油彩・キャンバス/110.0×144.0cm

《別府朝焼》は、別府の山々が朝日を受けて赤々と染まっていく瞬間をとらえています。鶴見岳を中心に伽藍岳や遠くに見える由布岳は、あざやかな朱色で、まだ朝日が届かない高崎山の麓や別府の街は暗い色で描かれています。山肌の質感を出すために、輪かく

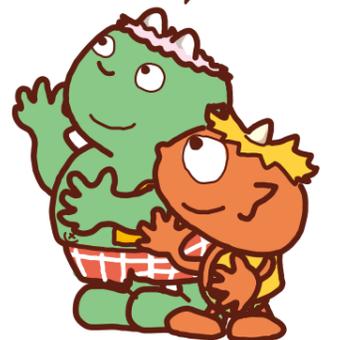
線をかすれさせたり、絵具を何度もぬり重ねたりして工夫しています。朝日を受けて、さまざまな色合いの赤を映す別府の山々の美しさが、伊谷の心に残ったのでしょう。

別府市美術館の生みの親、佐藤慶太郎 (1868年～1940年)



佐藤慶太郎は、「富んだまま死ぬのは、人間ののはじである」というアメリカの大富豪アンドリュー・カーネギーの言葉を自分の信念としていました。そのため、北九州の石炭業で築いた自分の財産を、公共施設の建設や有能な人材を育てる事業の資金として提供しました。晩年、病気の治療のために別府で過ごし、「温泉で体をいやし、芸術文化で心をいやしてほしい」と美術館の設立資金を別府市に寄付します。10年後、佐藤の願いは実現し、昭和25年(1950年)別府市に初めて美術館が誕生しました。

画家は、別府のどの風景を美しいと感じて、絵を描くのかなあ？



文学碑

佐佐木信綱歌碑

鬼山地獄にある歌碑は、古典文学の研究で知られる歌人で、国文学者である佐佐木信綱の作です。九州旅行の際に鉄輪を訪れました。



湯ふねのゆ
ほのあたたかみ 鰐の群
そがふるさを
忘れたるらし

野口雨情歌碑

鉄輪のむし湯前に、『十五夜お月さん』『七つの子』などで有名な詩人・童謡作家、野口雨情の歌碑があります。

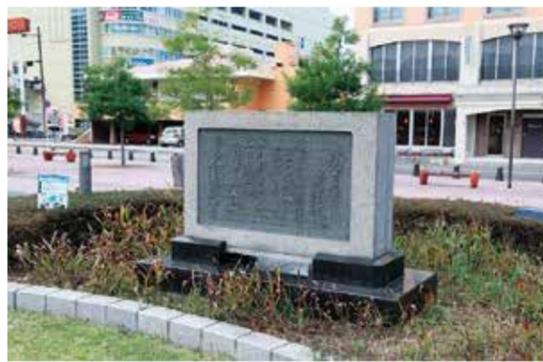
豊後鉄輪むし湯のかへり
肌 石菖の香がのこる
枕十六むし湯の中に
誰がねるやら来るのやら



ポール・クローデル詩碑

元駐日フランス大使のポール・クローデルが大正15年(1926年)、別府に来たときよんだ詩碑が北浜公園の一角にあります。

別府にわれ再び訪れん
温かき温泉と温かきもてなしに
わが命よみがえる
温かき温泉 なごやけき人の心
われ再び別府に来らん



万葉歌碑

志高湖畔の丘に、
をとめ等が
はなりの髪を ゆふの山
雲なたなびき 家のあたり見む
的ヶ浜公園内にも、
くれなゐに 染めてし衣 雨降りて
匂ひはすとも うつろはめやも



高浜虚子親子句碑

城島高原に高浜虚子親子の句碑があります。

大夕立 来るらし由布の かき曇り(高浜虚子)
ここに見る 由布の雄岳や 蕨狩(高浜年尾)
これがこの 由布といふ山 小六月(星野立子)

虚子は、正岡子規のあとをついで「ホトギス」を主宰しました。年尾は虚子の長男、星野立子は次女です。



郭沫若詩碑

郭沫若は、中国の政治家、文学者です。昭和30年(1955年)に別府に来たときに、漢詩を残しました。昭和53年(1978年)に県民の浄財でこの碑が建てられました。

彷彿但丁来 血池水在開
奇名驚地獄 勝境擅蓬来
一浴宵増暖 三巡春満懐
白雲千載意 黄鶴為低回

この漢詩の意味は現地の説明板にあります。



松尾芭蕉の句碑

別府市には、「奥の細道」で有名な松尾芭蕉の句碑が4基あります。
月かけや 四門四宗も 只ひとつ
作木の 庭をいさめる 時雨かな
古池や 蛙飛び込む 水の音
むすふより はや歯にひびく 清水かな



九条武子歌碑

大正三大美人といわれた京都出身の教育者で歌人でもある九条武子の歌碑が上人ヶ浜公園内にあります。

やわらかき
湯気に身をおく われもよし
今宵おぼろの 月影もよし

倉田紘文句碑

湯けむり展望台にあります。元別府大学の教授で、NHK俳壇や俳句王国を主宰したり、主要作家24人に選ばれるなど、日本を代表する俳人として活躍した倉田紘文の作品です。

ゆけむりの
風と遊べる 小春かな



そのほか別府出身の人の文学碑もいくつかあります。

浅利良道歌碑

春や良し
宵やぬくしとゆるゆると
歩める人は みな湯治客(楠町)

内藤凡柳句碑

我が生くる幸
志高の地 由布の天
(志高湖畔)

丸山待子歌碑

薄氷の
とけてあはだつ 池みずの
にごりめにたつ 春日となりぬ
(末広町)

別府市の地図

★ 紹介されたポイント P00 紹介ページ	♨ 温泉	🚗 国道
🏫 学校	🛣️ 主な県道	



スポーツ選手

稲尾 和久

昭和31年(1956年)に大分県立緑丘高校を卒業し、西鉄ライオンズに入団した



プロ野球の投手で、昭和36年(1961年)には年間42勝するなど、当時のプロ野球を代表する選手でした。「神様、仏様、稲尾様」と言われるくらい、素晴らしい投手でした。平成5年(1993年)には、日本野球界を代表する活躍が認められ、野球殿堂入りを果たしました。

山崎 次男

別府市出身で初めてオリンピックに出場したレスリングの選手です。昭和27年(1952年)、第15回ヘルシンキ大会に出場し、当時体格的に日本人は絶対勝てないといわれていたウェルター級で、見事5位に入賞しました。その後は、関西に住みスポーツジムを経営するなど、スポーツ関係の仕事に携わりました。

佐々木 栄子 (旧姓:高橋)

オリンピックに出場した別府市出身の水泳選手です。西小学校に

通っていたときに体育の授業で水泳の面白さを知り、山の手中学校で水泳部に入部し、実力をつけていきました。昭和39年(1964年)、別府大学1年生のときに東京オリンピックに出場しました。100メートルバタフライでは7位入賞、400メートルメドレーリレーではメダルにあと一步の4位入賞でした。現在は、別府市内のスイミングスクールで子どもたちの指導を行っています。

岡本 秀雄

南町の出身。南小学校、山の手中学校から大分水産高校(現:海洋科学高校)に進学し、ボート競技を始めました。

昭和47年(1972年)に行われたミュンヘンオリンピックのボート競技シングルスカルに出場しました。

小出 美沙都

北浜の出身。アーチェリーを始めたのは、中学校のクラブ活動として選んだのがきっかけでした。その後、中学生、高校生のときに全国大会などで優勝し、高校3年生の平成8年(1996年)7月にアトランタオリンピックアーチェリー競技女子個人総合と団体に出場しました。大学卒業後、別府市に戻り活躍しました。

琴別府(三浦 要平)

佐渡ヶ嶽部屋に所属していた別府市出身の元大相撲力士で、最高位は東前頭筆頭でした。



北部中学校から佐渡ヶ嶽部屋に入門、昭和56年(1981年)3月場所で初土俵をむかえ、平成元年(1989年)7月場所で十両に昇進しましたが、病気などで体調を崩して1年以上も休場し、番付を落としました。しかし、平成4年(1992年)5月場所で再び十両、その11月場所では新入幕など、奇跡的な再起を果たしました。一度、十両を経験しながら、降格した力士が入幕を果たしたのは、琴別府が初めてでした。平成5年(1993年)1月場所では、関脇・貴花田を一気に押し倒すなど、活躍しましたが、怪我に悩まされ、平成9年(1997年)11月場所で引退しました。現在は、別府市亀川でラーメン店を営んでいます。

田中 琴乃

オリンピックに出場した別府市出身の新体操選手です。5歳の頃から新体操を始め、新体操日本代表に選ばれ、日本国内・国外の大会で活躍しました。平成20年

(2008年)北京・同24年(2012年)ロンドンオリンピックに出場し、北京では団体総合10位、ロンドンでは団体総合7位という成績を残しました。現在は、化粧品会社で働いており、リオデジャネイロオリンピックでは新体操美容コーチを務めました。

今宮 健太

別府市出身のプロ野球選手です。明豊高校に入学し野球部に所属していたときに、春夏の甲子園で活躍しました。



© SoftBank HAWKS

その頃は、遊撃手だけではなく、投手としてマウンドに立つこともあり、甲子園では154km/hもの速球を投げたこともありました。平成21年(2009年)に福岡ソフトバンクホークスに入団し、守備力の高さが評価され、ゴールデングラブ賞を何回も受賞したり、人気や実力の高い選手しか出場できない、オールスターゲームに出場するなど、活躍しています。

別府市出身のオリンピック選手たち

オリンピック名	種目	名前
1952年 ヘルシンキ大会	レスリング	山崎 次男
1964年 東京大会	水泳	佐々木 栄子
1972年 ミュンヘン大会	ボート	岡本 秀雄
1996年 アトランタ大会	アーチェリー	小出 美沙都
2008年 北京大会	新体操	田中 琴乃
2012年 ロンドン大会	新体操	田中 琴乃

2020年の東京大会には、もっと増えるかもしれませんね。

別府学を学ぶみなさんへ

みなさんは、別府市のことをどのくらい知っていますか。温泉湧出量、源泉数などが全国一で、日本一の温泉都市といわれていることは知っているでしょう。そして、日本有数の温泉観光都市であるというのも聞いたことがあると思います。



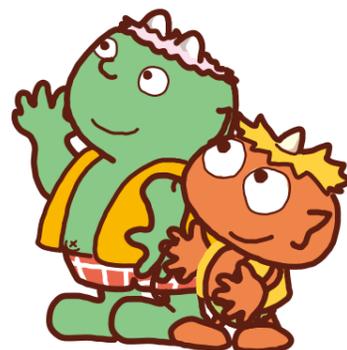
しかし実は、温泉だけではなくさまざまな伝統文化や産業などがあることは、あまり知らないかもしれませんね。この「別府学」ではそのようなあまり知られていない別府のすごさやよさを学ぶことができます。

なぜそのようなことを学ぶのでしょうか。それはいくつかの理由があります。ひとつは「別府学」を学んで、別府市が温泉と自然に囲まれた世界中のどこにもない素晴らしいまちであることを知り、もっと別府のことを好きになってもらい、別府市に住んでよかったと思ってほしいからです。そしてその別府市のよさを市外の人にきちんと話せるようになってほしいと思います。そうすることによって、多くの人がおとずれ、別府に住んでみたいと思う人が多くなるからです。

もうひとつは、自分から進んで別府市発展のためのまちづくりを担ってほしいと思っています。別府市の未来は、みなさんのような若い人の力や考え方が必ず必要です。そして次の世代の小学生にもこのことを伝えてほしいと思います。

みなさんの力で、別府市がこれからも長く発展していくことを心から願っています。

別府市長 長野恭紘



編集委員

豊田寛三(委員長) 鶴田浩一郎(副委員長) 段上達雄* 小田毅*
清水宗昭* 首藤康 高橋伸子 平野芳弘* 淵優子 糸長憲司 平野俊彦
本田明彦 篠田誠 (*は執筆者)

専門委員

入江秀利* 外山健一* 吉武順造 加藤ひろみ* 堀英樹* 柏本文俊
森修二郎 二宮俊和* 本山薫* (*は執筆者)

協力者

別府大学文化財研究所 別府市美術館
大分県農林水産研究指導センター農業研究部花きグループ
杉乃井地熱発電所 (株)みょうばん湯の里 足立高行 高野裕樹 玉川剛司

参考文献

「別府市に残る優れた自然」別府市 1994
「新版 大分県植物誌」大分県植物誌刊行会 1989
「猪の瀬戸湿原及び周辺地域の植生図示と植物相」大分県・別府市 1993
「収蔵品図録No.1 美術品(日本画・洋画)」別府市美術館 1992
「佐藤慶太郎伝」石風社 2008
「美しき九州『大正広重』」吉田初三郎の世界 海鳥社 2009
「大分県の歴史」山川出版社 1971
「文化財研究所年報」別府大学文化財研究所 2003
「別府市誌」別府市 2003
「鬼の岩屋古墳」鬼の岩屋まつり実行委員会 2005
写真集「郷愁の別大電車と沿線風景」大分合同新聞社 2005

地図

この地図の作成に当たっては、国土地理院発行の2万5千分1地形図を参考にした。

小学校5・6年生 学習資料 別府学 郷土を学ぶ

初版 平成29年(2017年)3月31日
第8版第1刷 令和7年(2025年)3月31日

発行者 別府市教育委員会
〒874-8511
大分県別府市上野口町1番15号
TEL0977-21-1111
FAX0977-22-5100

編集・印刷 株式会社 佐伯コミュニケーションズ

表紙の写真

